

## 「香油を注がれたイエス」(ヨハ 12:1~8)

一人の女性がイエスに高価な香油を注いでイエスを信頼し慕う真情を吐露したという出来事は初代教会に広く伝承されていたと思われます。この伝承には二つの性格があります。一つは油を塗る、油を注ぐという言葉からキリストという言葉が浮かびます。イエスが何者であるかという問いに対してイエスこそキリストであるということがこの油注ぎによって象徴されていることになるのです。二つ目はこの伝承がイエスの葬りの準備というモチーフを伝えていることです。四つの福音書はこの記事をそれぞれの理解で記し、三つの型(ルカの型、マルコ・マタイの型、ヨハネの型)が認められます。ヨハネはマルコ・マタイと同じく、この出来事を受難の前に置いてイエスの葬りの準備としての意味をもたせていますが、物語の内容はかなり異なり、場所も日付も違います。香油は、マルコ・マタイではイエスの頭に注がれますが、ヨハネではイエスの足に塗られ、髪の毛でぬぐいます。この点ではルカに近い描写になっています。また、文句を言ったのはマルコ・マタイでは「ある人たち」、「弟子たち」ですが、ヨハネではイスカリオテのユダで、「イエスを裏切る、直訳は引き渡す」という説明がついています。イスカリオテのユダは福音書が書かれた時代が後になるほどその悪魔性が増していく傾向にあります。そして、大きな違いは、共観福音書では女性の名前は記されていないのですが、ヨハネではラザロの姉妹マリアとされていることです。それぞれの福音書著者がこの伝承を用いて語ろうとしている意図を受け止め、その中に信仰への語りかけを聴くことが大切であると思います。

では、マリアの行為にはどういう意味があったのでしょうか。荒井献氏の言葉を借りるならば、マリアはイエスに対する共感のしるしとしての香油注ぎを、共苦のしるしとしての香油注ぎに引き上げたのです。マリアの香油注ぎを苦難のイエスに対して、「この方こそキリストであると告白した」と位置づけることができるのではないかと思います。また、マリアはこの後イエスが十字架上で死ぬことになることは知らなかったと思います。しかし、イエスはマリアの香油注ぎを自分の埋葬の準備と意味づけ、受け入れたのでした。この福音書の著者はマリアの信仰的自立を描いたのではないのでしょうか。ラザロのよみがえりの物語において、マルタはイエスを出迎えるのに対して、マリアは、座ったままでした。しかし、この物語では給仕はマルタに任せ、マリアは香油をイエスの足に塗り、それを自分の髪でぬぐうことを描く対照こそ、著者が意図するところであったと思われます。

(3月6日説教)